

独占資本主義分析と 宇野「帝国主義段階論」(中)

水 谷 良 夫

I 独占資本主義への移行と〈経済学の方法〉・(本誌、第2巻第2号)

II 独占資本主義と「金融資本」

1. 「生産の集積」と「固定資本の巨大化」
2. 独占資本と「金融資本」(以上、本号)
3. いわゆる「金融資本の蓄積様式」について

II 独占資本主義と「金融資本」

宇野弘蔵氏の独自の『経済学方法論』とそれに基づく「段階論」の方法的特徴——既に見たように、それは資本主義発展の各段階(「重商主義」・「自由主義」・「帝国主義」)における「指導的」な資本主義国の、「支配的」な資本形態の「タイプ」＝類型的解明といういわば「二様の一般的・法則的認識の峻拒」、すなわち、一方で資本主義の段階的発展・移行の『法則性』の否認と、他方では各段階の特質を『包括する』一般的・法則的認識の有効性を拒否する方法であった——の検討(前稿)を承けて、ここでは、われわれの独占資本主義分析の基本視角にたち、具体的に宇野「帝国主義段階論」に内在する方法とそれを支える基本的認識を独自の「金融資本」概念を中心に検討・批判すること、この点が本稿の課題である。

「……帝国主義時代は、株式会社形式による、最初から資本家社会的に集中せられた資本をもって、比較的大規模なる固定施設をもった鉄工業等の重工業としてあらわれた所謂金融資本によってその基礎を与えられる。」⁽¹⁾

「……金融資本は、……資本主義の一定の発達段階に出現する資本の型として、商人資本、産業資本に対比せられる歴史的に特殊な蓄積の様式をもって発展するものとして規定されなければならない。」⁽²⁾

「帝国主義時代」、すなわち独占＝帝国主義段階における資本主義の段階的変容の基本線は、——宇野氏によれば、それは「固定資本の巨大化」と「株式会社」の普及・発展のもとで形成・確立される「金融資本」を「基礎」とし、この「金融資本の蓄積様式」によって現出する変容である、とされている。そこで、以下の宇野「帝国主義段階論」の独自の特徴の検討も、この段階における構造と動態を規定する主導的契機として位置づけられているこの「金融資本」の概念を中心としたものとならざるを得ない。

ここで、改めて主題の設定と展開のために付言すれば、宇野氏の「帝国主義段階」の「基本的規定」は、周知のように、「経済政策論」の第三編「帝国主義」——第一章「爛熟期の資本主義」、第二章「金融資本の諸相」、第三章「帝国主義の経済政策」——において与えられている。このうち、第一章は、第一節「資本集積の増大と固定資本の巨大化」、第二節「株式会社の機能」、第三節「金融資本の蓄積様式」から構成されており、そこではドイツを「典型」としながらもなお「金融資本の時代のあらゆる国々に或る程度共通する」・「金融資本の一般的規定」⁽³⁾が意図されている。しかしながら、既に明らかにしたように、宇野「経済学方法論」に依れば、「段階規定」の主眼はむしろこの「同じ金融資本を基礎とする両極的發展の結果」⁽⁴⁾として実体的に具現する「ドイツ金融資本」と「イギリス金融資本」を対置する「タイプ」＝類型比較を主内容とする第二・三章に置かざるを得なくなるといえよう。従って、問題は、差当り方法的には、宇野氏の場合におけるこの第一章と第二・三章との編別構成上の関連に、すなわち「金融資本」の概念構成を行なう際の、「形式」的な一般性と「実体」的な特殊性との区別と統一の方法論的処理の問題に帰着することとなる。⁽⁵⁾ 以下の考察の主題もこの点に係る。

1. 「生産の集積」と「固定資本の巨大化」

- (1) 資本主義の独占＝帝国主義段階への移行を画する起点として、従って、「金融資本」の形成・確立に至る端緒的範疇として、宇野氏が提起されているのは、「固定資本の巨大化」である。

「固定資本の巨大化は、資本主義の発展に新なる段階を画する先ず第一にあげられるべき要因といってよい」⁽⁶⁾

そして、この「固定資本の巨大化」が「段階規定」の「第一」の「要因」としてもつ意義と位置は、宇野氏の場合、次の二点に求められている。

「それは単に資本主義の発展に伴う集積の増大とはいえない。綿工業によって代表せられた産業資本の時代には見られなかったような固定資本の巨大化を実現したのである」⁽⁷⁾

「鉄工業等の重工業が代表的産業になると共に、それ(「産業間の不均等な発展」——引用者)は最早や……産業資本的機構によって始末できないものとなり、……何等かの他の方法をもって回避せざるをえなくなる。株式会社制度の産業企業への普及は、まさにこの新しい途を拓くものに外ならなかった。」⁽⁸⁾

すなわち、その第一は、ここでの「固定資本の巨大化」が宇野氏のいわゆる「原理論」とは全く切断された「段階論」的な概念としてもつ意義である。また、第二はそれが、宇野氏の場合、「株式会社」→「金融資本」の形成・確立という「段階規定」の基本的な論理展開の直接的な端緒となるというその意義と位置づけである。そして、先ずはその発端において、19世紀後半の鉄工業の発展にみられるような、「固定資本の巨大化」という事実にごうした独自の意義と位置が付与されることにより宇野「帝国主義段階論」の基本的特徴が軌道づけられることになるとともに、そこに極めて深刻な問題を提起することにもなるのである。

この場合、問題となるのは、先ず第一の点についていえば、いわゆる「段階論」と「原理論」との断絶——資本主義の段階的移行の、ここでは独占＝帝国主義段階への移行の、一般的「法則性」の否認という「段階論」の方法——が冒頭で確認されているという点である⁽⁹⁾。

また、第二の点は、この「固定資本の巨大化」がもたらす「困難」・「過度の行き過ぎ」・「障害」が指摘され、それを「回避」するものとして直ちに「株式会社」が展開されるという方法(「独占」の概念の欠如)のことである。⁽¹⁰⁾ 総じて、ここでは、宇野氏の場合、レーニン『帝国主義論』における独占＝帝国主義段階把握のための端緒的範疇である「生産の集積と独占」とは決定的に異なる方法が採られているという、その方法論的差異に由来する問題に帰着する。

(2) いうまでもなく、「固定資本の巨大化」の意味するものは、差し当り、一般的には——そして、宇野氏の場合にも、その「資本集積の増大と固定資本の巨大化」の叙述内容からすれば——、それ自体としては、生産諸力の発展のもとで生産過程の技術的・経済的諸条件に規定された生産＝資本規模の巨大化——労働手段体系の巨大化(生産設備の大型化)とこれに伴う企業の経営規模拡大(最低必要資本量の増大)——にはかならない。そして、「重工業、特に鉄工業の19世紀後半における発展」⁽¹¹⁾がこの傾向を極めて顕著なものにしたことは、宇野氏が指摘されるように、否定できない「事実」である。こうした「事実」に基づいて、独占＝帝国主義段階規定の端緒をいかに

概念化して認識するか——この点が先ず問われるべき問題である。

レーニンの場合、周知のように、それは「生産の集積と独占」であった。

「生産の集積による独占の生誕は、総じて、資本主義の発展の現在の段階の一般的かつ根本的な一法則である」⁽¹²⁾

レーニンは、「工業の巨大な成長と、ますます大規模化していく企業への生産の集中のおどろくほど急速な過程」⁽¹³⁾を「事実」として確認し、それを「経済生活のなかで決定的役割を演じている独占を創りだしたほどに高度の発展段階に達した、生産と資本の集積」⁽¹⁴⁾であると総括することにより「生産の集積と独占」という独占＝帝国主義段階の段階規定の端緒的範疇を設定したのである。このレーニンの範疇設定において重要なことは、段階規定の端緒を先ず生産過程（資本制の生産のもとでは、剰余価値の生産＝搾取関係の再生産の過程）における段階的变化——「生産の集積」と産業独占の成立に求めた、という点にほかならない。そして、この「生産の集積」と「独占」が、マルクス『資本論』で、既に明らかにされている資本の集積・集中と生産諸力発展という資本制の蓄積の基本的法則の「発展」・「継続」として生じたものであるとしてそれを基礎づけ、他方では、それが「生産と資本の集積」一般でも「独占」一般でもない新たな生産力発展のもとでのこの段階固有の端緒的範疇とし爾後の展開の発端としたこと——このことが重要なのである。そのことにより、「生産の集積」に基づく「独占」への転化が、従って、資本主義の独占＝帝国主義段階への発展・移行が、はじめて、その「必然性」において示され、その展開として段階の特質規定が与えられたからにほかならない。⁽¹⁵⁾

宇野氏の場合には、これに反して、レーニン『帝国主義論』の観点は「とりえないもの」⁽¹⁶⁾とされ独自の方法を採用されるため、先ずは「帝国主義」段階への資本主義の段階的移行が資本制の蓄積の基本的法則に内在する必然性として全く把握されえないものとなっている。

宇野氏のこうした「段階論」の独自の方法は、次のような基本的認識に支えられている。

「資本の集中、集積の増進は、一定の段階では独占になるといえば誰も疑問とするところはないように考えられるが、よく考えて見ると、そういう考えの裏には常に一定の市場を想定し、特定の産業を予想するということがあるではないか。」⁽¹⁷⁾

「市場の一般的規定のうちに特定の範囲の市場を暗黙の内に導入したり、特定の産業の偶然的事情を想定したりすることから、原理論を骨抜きにすることになると、『独占』概念は、段階論的な歴史的な性格を失って、原理論的な外観をとり、……資本主義に一般的なものとしてせられるのが当然であろう」⁽¹⁸⁾

さらに、「……帝国主義論のような段階論になると、具体的事実はもはや単なる例証であってはならないのではあるまいか。それは当然にタイプの問題になるのです」⁽¹⁹⁾ということになる。

すなわち、「重工業、とくに鉄工業の19世紀後半における発展」のうちに見られる「固定資本の巨大化」と「独占」は、「特定の産業における偶然的な事情」をふくむ「具体的事実」であり、それを「原理論」からの展開として基礎づけること自体、その「段階論的な歴史的な性格」を失う、従って「タイプの問題」になると——、ここには、レーニン『帝国主義論』に対する誤解・歪曲に基づく「段階論の方法」が端的に示されているといえよう。⁽²⁰⁾

レーニンは、既に述べたように、新たな生産諸力の巨大な発展を直接的な生産過程にまで遡って、先ず「事実」として確認し、それを資本制の蓄積の基本的法則によって基礎づけることによって、この基本的法則が段階的移行の起動力となること(独占＝帝国主義段階の必然性)を示したのである。それは、宇野氏が強調されているような、資本の集積・集中から無媒介的に「独占」への傾向を説いているものではないのである。資本の集積・集中と生産諸力発展が一般的に進展するということと、それを基礎として社会的再生産の枢要な位置を占める、特定の諸部門で(独占的市場構造の形成を媒介として)「生産の集積」に基づく「独占」が成立するということは、決して矛盾するものではなく、むしろ、この基礎ではじめて「特定の産業」で成立する「独占」が単なる部分的・「偶然的」な「事実」ではなく、この段階の社会的総資本の再生産過程全般を規定する主導的契機となるそのゆえんが明らかにされるのである。

資本主義の独占＝帝国主義段階への発展・移行の「必然性」に関するこうした基本的認識を欠如させ、それゆえに独自の方法を探らざるをえない宇野「帝国主義段階論」は、そもそもの冒頭において、——段階的発展・移行の一般的な「法則性」の否認という点で——第一の「失格」を刻印される、といえよう。

(3) 宇野氏のいわゆる「固定資本の巨大化」は、既に述べたように、その一般的含意として、物的な労働手段体系(生産設備)の巨大化とそれに伴う

企業規模の拡大（最低必要資本量の増大）という二要因を含むものであった。そして、宇野氏の場合、先ずこの「固定資本の巨大化」の物的・技術的要因が「比較的大規模なる固定施設をもった鉄工業等の重工業」として、上述したように、第一の点においては資本の集積・集中と生産諸力発展という資本制的蓄積の基本的法則——宇野氏の場合、「原理論」——とは「断絶」したものであることをもって「段階規定」の端緒たる意義が与えられていたとすれば、次に問題とするこの「固定資本の巨大化」に関する第二の問題は、それが企業規模の拡大（最低必要資本量の増大）という要因を含むことを介して、直ちに「株式会社」の普及→「金融資本」の形成・確立をもたらす起点となるというその意義と位置づけに係るものである。

「固定資本の巨大化」→「株式会社」→「金融資本」というこの宇野「帝国主義段階論」の展開は、再び、われわれが依拠し、その継承・発展のうちに独占資本主義分析の基本視角を構築しようとしているレーニン『帝国主義論』における「生産の集積と独占」を端緒とする展開とは、決定的に異なるものである。そして、この両者の差異は、何よりも次の点で重要である。すなわち、レーニン『帝国主義論』では、このいわゆる「固定資本の巨大化」に含まれる「生産」＝「資本」規模の巨大化という二要因が産業において新たな生産力（「生産の集積」）を担う主体である独占資本の形成として統一的に把握され——〈競争〉の〈独占〉への転化——、この〈独占と競争〉のもとで資本主義の「基本矛盾」が激化し、新たな展開をとげること、——このことこそが独占＝帝国主義段階の基本認識として、レーニンが強調してやまなかった点であり、われわれの基本視角の要点をなすものにほかならないのである。⁽²¹⁾

「自由競争は資本主義と商品生産一般との基本的属性であり、独占は自由競争の直接的对立物である。……独占は、自由競争から発生しながらも、自由競争を排除せず、自由競争のうえに、またこれとならんで存在し、このことによって、一連のとくに鋭くてはげしい矛盾、軋轢、紛争をうみだす。」⁽²²⁾

従って、「固定資本の巨大化」が「株式会社」の普及をもたらすという宇野氏の展開——その意味での「固定資本の巨大化」の意義と位置づけ——を、われわれは到底容認することはできないのである。宇野氏の場合には、独占＝帝国主義段階の主導的契機＝主体である「独占」が決定的に欠如しているとともに、そのもとでの資本主義の「基本矛盾」の激化と新たな展開を分析する視角が全く無視されているからにほかならない。

先ず、「独占」の決定的欠如から——。宇野氏においては、「段階規定」の端緒的範疇として「固定資本の巨大化」が強調され、その一般的含意たる二要因のうちの物的・技術的要因が「原理論の外から来る」⁽²³⁾「段階論」的概念であること、その問題も含めて既に指摘した通りであるが、いわばそのことと相互規定的に、今度は「生産」規模の「巨大化」から、「独占」を導き出す代りに、直ちにこれに伴う他の一要因である「資本」規模の増大(最低必要資本量の増大)に対応する「株式会社」(形式)の普及を展開され、本来「独占」に帰結する問題を単なる企業形態の問題へと矮小化へ、事実上、欠落させていくことになるのである。いわゆる「固定資本の巨大化」によってもたらされる「困難」・「過度の行き過ぎ」・「障害」の「回避」とは、宇野氏の場合、結局のところ資金調達の問題に、すなわち社会的資金の集中・動員機能をもつ「株式会社制度の産業企業への普及」に帰着することになるのである。

「……株式会社にとっては、その事業に要する資本を、個人的蓄積によって制限せられることなく、いわば社会的に蓄積せられた資本をその必要に応じて集中して資本化しうる」ことこそ「……株式会社形式が種々なる産業に、特に巨額の固定資本を要する産業に普及する根本的基礎をなすものといつてよい」⁽²⁴⁾

要するに、宇野氏は、いわゆる「固定資本の巨大化」によってもたらされる新たな生産諸力の発展という実体的基礎を所与のものとして「帝国主義段階論」の端緒的範疇に設定し、そこから、この実体の外被となる形式、すなわち「巨大化」した「固定資本」を必要とする生産過程を許容・包摂しうる企業形態として「株式会社形式」を展開されているのである。そして、この両者を媒介するものこそ、資金調達＝社会的資金の集中・動員にほかならない。この点、宇野「帝国主義」の編別構成において、第一章の第一節「資本集積の増大と固定資本の巨大化」に続く第二節が「株式会社の機能」と題されているのは、極めて象徴的であるというよう。宇野氏独自のこうした実体と形式の分離の方法に対して、直ちに想起されるのは、既に述べたように、そうした分離ではなく統一として、すなわち「生産の集積」に実体的に基礎づけられたこの段階の新たな主導的契機＝蓄積主体たる独占資本の成立を導き、それを基軸とした新たな段階の構造と動態——そして、「矛盾」の展開——の概観を系統的に示したレーニン『帝国主義論』の方法である。今や、両者の差異は明白なものとなった。レーニン『帝国主義論』の観点にたつわれわれは、「独占」の概念を欠如させた宇野氏の「株式会社」を容認するこ

とはできないのである。

もっとも、宇野氏の場合にも、「独占資本」が全く登場しないわけではない。既に示したように、第二編「帝国主義」の冒頭部分、「帝国主義時代は、……金融資本によってその基礎を与えられる」という文章に続けて、「それは最早や産業資本のように個々の資本家としての競争を貫徹せしめることのできないものとなり、所謂独占資本としての特殊の組織体をも形成することになるのであった」⁽²¹⁾と指摘されている。そして、「こういう発展の形態は、……資本主義体制の、いわば順調なる発展をなすものとはいえない。それは資本主義がその社会的体制として前提とする自由競争を自ら或る程度否定しつつ行われる発展である。資本主義に内在する矛盾の現実的解決は、最早や資本主義的機構そのものにまかしてはおけないものとなる。……したがってまた……益々その矛盾対立を激化せざるをえないという、解決のない展開によって解決しようとする」⁽²²⁾とも述べられている。しかし、こうした「独占」・「競争」・「矛盾対立の激化」という指摘は、第一章の「株式会社」・「金融資本」の一般的規定では全く生かされていないのである。そして、「独占資本」も第二章で「ドイツにおける重工業を中心とする独占的組織の発展」として具体的に取扱われているにすぎない。

(注)

- (1) 宇野弘蔵『経済政策論』（弘文堂、1954年）、132頁。なお、同書『改訂版』（1971年）では、該当する箇所が、次のように書き改められている。「……帝国主義時代は、株式会社による最初から資本家社会的に集中せられた資本をもつて行なわれる比較的大規模なる固定施設をもった鉄工業等の重工業がドイツのような後進国では却っていわゆる金融資本なる新たな資本のタイプを形成する基礎となるのであった」。（『宇野弘蔵著作集』、岩波書店、第7巻、146～147頁。以下、『改訂版』からの引用は、この『著作集』第7巻による。）ここでは、それ自体として極めて曖昧な表現ではあれ、改訂前の原著で意図されていたと思われる「大規模なる固定施設」と「株式会社形式」を両契機とする「金融資本」が「帝国主義時代」の「基礎」となる、という全体の文意が「改訂」されており、むしろ上記の両契機がドイツの「金融資本」形成の「基礎」となる、という文脈の中でそれが全体として、「帝国主義時代」といかに関連するかという点では、ヨリ一層曖昧な文章となっている。
- (2) 同上、157～158頁。『改訂版』、173～174頁。
- (3) 同上、200頁。『改訂版』、213頁。
- (4) 同上、203頁。『改訂版』、216頁。
- (5) 宇野『経済政策論』第三編「帝国主義」の方法と内容に関しては、「宇野派」内部において種々の解釈・批判・異論がある。ここではその種の「論争」に立ち入る余裕は全くないが、最近の「宇野派」の状況を整理・概観しつつ、この第三編「帝国主義」の編別構成とその内的論理を、独自の解釈を加えて包括的に検討したものとして、馬場宏二「不均等発展の問題——金融資本と帝国主義（一）——」（『社会科学研究』第

- 31巻第6号、1980年、以下、引用の際には「馬場(一)」と略記)、「株式会社の問題——金融資本と帝国主義(一)——」(同上、第32巻第1号、1980年、同「馬場(二)」)、「金融資本の蓄積様式——金融資本と帝国主義(二)——」(同上、第32巻第3号、1980年、同「馬場(三)」)を参照。因に、馬場氏は「第一章『爛熟期の資本主義』は、全体として金融資本の概念を抽象的に——原理論にかなり近い抽象的レベルで——規定したものである」(「馬場(一)」、170頁)ことを指摘し、このことが、後述するように、第二章との関連で宇野氏の「金融資本」概念の把握、従って「段階規定」的方法的特徴となっていると主張されている。
- (6) 宇野前掲『経済政策論』、134頁。「改訂版」、150～151頁。なお、「改訂版」では、第一章第一節の表題が「資本集積の増大と重工業における固定資本の巨大化」に改められ、引用箇所も、「かかる特定産業(「重工業、特に鉄工業」——引用者)における固定資本の巨大化は、……」と変更されている。
- (7) 同上。
- (8) 同上、138頁。「改訂版」では、当該箇所が、次のように大巾に書き改められている。「産業部門間の不均等な発展は、鉄工業等の重工業が重要な産業となるとともに、産業資本的機構によってはだんだんと補整されることが困難となってくる。株式会社制度の産業企業への普及は、まさにこの傾向を助長するものであるが、同時にまた資本主義経済の基本的法則としての利潤率均等化の法則を歪曲して表わすことにもなるのである。」154頁。
- (9) 前稿、注⑧(77～78頁)を参照されたい。また、例えば、馬場氏は「景気循環のくり返しによって生産力が上昇することはいえるが、それが固定資本の巨大化を必ずもたらすとはいえない」がゆえに「固定資本の巨大化は原理論的概念でなくむしろ段階論的なものである」として、この「論理の断絶」を一層明確化されている(前掲「馬場(二)」、91頁)。もっとも、その馬場氏自身、「タイプ論を軸とする段階論自体が段階間の推転を説かないことを、「段階論の方法の根本にかかわる問題」だとされているのであるが……(前掲「馬場(一)」、178頁)
- (10) 宇野前掲『経済政策論』、135～138頁。「改訂版」、151～154頁。ただし、「改訂版」では、「株式会社」の普及が「固定資本の巨大化」による「困難」を「助長する」という原著とは異なる記述に変更されているが(注⑧参照)、他の箇所では「……資本主義は、……その始末に困難を感じる種々なる障害を回避するために、資本家的に社会的なる……形式として株式会社制度を普及することになったのであった」という、原著と同じ趣旨の文章がそのまま残されている。
- (11) 同上、133頁。「改訂版」、150頁。
- (12) レーニン「資本主義の最高の段階としての帝国主義」(宇高基輔訳、岩波文庫)、35頁。
- (13) 同上、28頁。
- (14) 同上、145頁。

- (15) 「資本論」と「帝国主義論」との理論的関連、とくに「生産の集積と独占」の範疇の段階的意義に関しては、南克巳「『資本論』体系の発展としての『帝国主義論』」(宇佐美誠次郎・宇高基輔・島恭彦編『マルクス経済学体系Ⅲ 帝国主義論』有斐閣、1966年、所収)を参照。
- (16) 宇野弘蔵「帝国主義論の方法について」(『思想』No377、1955年11月)、60頁。
- (17) 同上。
- (18) 同上。
- (19) 同上、61頁。
- (20) 宇野氏の「段階論の方法」の一般的特徴と問題点については、前稿を参照されたい。
- (21) 拙稿「独占と資本蓄積(I)——独占資本主義分析の基本視角——」(『金沢大学経済学部論集』第2巻第1号、1981年10月)を参照されたい。
- (22) レーニン前掲「帝国主義」、144～145頁。
- (23) 前掲「馬場(二)」、93頁。
- (24) 宇野前掲「経済政策論」、142～143頁。「改訂版」、159頁。
- (25) 同上、132頁。「改訂版」、147頁。
- (26) 同上、132～133頁。「改訂版」、147頁。なお、「改訂版」では若干表現上の変更はあるが、基本的には原著の趣旨は残されており、またそれが爾後の展開に生かされていないという点でも同じである。

2. 独占資本と「金融資本」

- (1) 「金融資本」は、宇野氏によれば、「帝国主義時代」に出現する支配的な「資本の型」＝新たな「資本の蓄積様式」の展開基軸となるものである。そして、「株式会社」の発展こそがこの「金融資本」の形成に「基本的規定」を与えるものとされる。

「産業企業の株式会社形式による発展は、かくして支配的な資本の型態を産業資本から金融資本に転化せずにはおかぬ……」⁽¹⁾

宇野「帝国主義段階論」における「固定資本の巨大化」から「株式会社」への展開を検討したわれわれは、今度はこの「株式会社」から「金融資本」への展開を辿り、その「一般的規定」を、ここでもまた批判的に、検討してみなければならない。

以下、宇野氏の「金融資本」概念の検討を行なうが、それに先立ち、われわれの批判の基準を、差し当りレーニン『帝国主義論』に依り確認しておきたい。

「独占——これは『資本主義の発展における最新の局面』の最後のことばである。だが、近代的独占の現実的な力と意義とにかんするわれわれの観念は、もしわれわれが銀行の役割を考慮にいれないならば、きわめて不十分で、不完全で、はなはだしい過小評価となるだろう。」⁽²⁾

「………20世紀〔の初頭〕は、古い資本主義から新しい資本主義への、資本一般の支配から金融資本の支配への、転換点である。」⁽³⁾

「生産の集積，そこから発生する独占，銀行と産業との融合あるいは癒着——これが金融資本の発生史であり，金融資本の概念の内容である。」⁽⁴⁾

レーニンが「新しい資本主義」，すなわち独占＝帝国主義段階における「金融資本」の出現に際して，その「発生史」および「概念の内容」として最も注目し重視したのは，いうまでもなく「独占」——「生産の集積，そこから発生する独占」——であった。すなわち，この「生産の集積」に基づいて，新しい質と巨大な規模に達した生産諸力を，その直接的生産過程において組織する現実資本＝資本蓄積の主体である産業独占と，他方で「銀行業務の集積」に基づく銀行独占の形成，ここにレーニンの力点が置かれていたのである。これが先ず第一に確認すべき点にほかならない。

レーニン『帝国主義論』における「金融資本」概念について第二に注目すべきことは，この「独占」——産業独占と銀行独占——の基礎上で，この両者が「融合」・「癒着」することにより，この「近代的独占」が新たな「現実的な力と意義」とを獲得してゆく，という点である。⁽⁵⁾そして，このこと自体は，独占＝帝国主義が「金融寡頭制」の「支配と強制」の体制であり，そのもとでの生産の「社会化」を一層押し進めることによりこの段階固有の「一連のとくに鋭くしてはげしい矛盾，軋轢，紛争を生みだす」という問題との関連で具体的な解明を要する，という点である。⁽⁶⁾この点が第二の確認点となる。

(2) 以上，二点を確認したうえで，このレーニン『帝国主義論』の「金融資本」概念を基準とすると，宇野氏が主張される「株式会社形式の発展」・「この発展の内に確立される金融資本」とは，一体どのような内容と特徴をもつものであろうか——驚くべきことに，しかし事実として，宇野氏は，われわれがここで対象としている『経済政策論』第三編「帝国主義」の，とくにその第一章（「爛熟期の資本主義」）において，「金融資本」の「一般的規定」を明確なかたちで与えてはいないということである。

宇野氏の、既に指摘したような、論理展開——「固定資本の巨大化」→「株式会社」→「金融資本」→「金融資本の蓄積様式」——からすれば、第一章の第一節「資本集積の増大と固定資本の巨大化」に続く第二節「株式会社の機能」がこの「株式会社」→「金融資本」という展開の内容を与えるべき箇所であるといえようが、ここでは、A「株式会社の資本」、B「株式会社と銀行」、C「支配集中の手段としての株式会社」という構成からも明らかなように、文字通り「株式会社の機能」が説かれるのみで、「金融資本」の明示的かつ積極的な「一般的規定」はそのどこにも見出せないのである。因に、馬場宏二氏は、宇野氏が「金融資本をヨリ一般的に把える見地」をもっていたのであり、この第一章第二節が「宇野による金融資本規定のいわば山場である」としながらも、「この節は、用語としての金融資本の定義という形で書かれていないこと」を認め、「むしろ全節、あるいは全章をあげて、金融資本が規定されているといってよい」⁽⁷⁾と独自の解釈を示している。したがって、われわれも、「全節」・「全章」の断片的な記述の中からそれを推測して解釈する以外にはないのである。

ところで、宇野氏のいわゆる「金融資本」に関して注目されるのは、次のような規定である。

① 「……株式会社形式による、最初から資本家社会的に集中せられた比較的大規模なる固定施設をもった鉄工業等の重工業としてあらわれた所謂金融資本……」⁽⁸⁾

② 「……こういう銀行の役割自身が、産業における、殊に巨大なる固定資本を擁する重工業における株式会社制度の発展によってその基礎を与えられたのであって、銀行自身の集中も、またその産業に対する特殊の関係による金融資本化も、結局は産業における集中によってその内容を与えられるのである」⁽⁹⁾

③ 「……金融資本は、資本家の再生産過程を基礎としながらある程度それと遊離した形でこれを支配するという特殊の……性格をもっている……」⁽¹⁰⁾

すなわち、①の指摘からは——「金融資本」がいわゆる〈重工業株式会社〉として具体的に発現し存在するということ、⁽¹¹⁾ ②からは、いわゆる〈銀行と産業との結合関係〉が「金融資本の核心」⁽¹²⁾にあること、そして、③からは、「金融資本」が直接的生産過程から「遊離」してこれを支配するといういわゆる〈支配機構の形式〉をもつものであること、⁽¹³⁾ 以上の三点が宇野氏の「金融資本」の概念内容として浮かびあがってくるのである。総じて、ここに見られる宇野氏の「金融資本」の「一般的規定」は、その内容として「金融資本」の〈支配機構の形式〉に著しく偏倚したものとなっていること、そしてそれは、既に明らかにした「固定資本の巨大化」から「株式会社」を展開す

る論理の一面性——「独占」概念の欠如——に直接由来するものといえよう。一言にして、「独占」なき「金融資本」にほかならない。

それは、すなわち、こうである。宇野氏が「固定資本の巨大化」から「株式会社」を導き出す論理展開では、既に見たように、「巨大化」した「固定資本」を擁する新たな生産諸力の発展はいわば外的な与件とされたうえで、問題をもっぱらこの新たな生産諸力を許容し包摂し、従ってそれを支配する企業形態に集中し、「株式会社」(形式)の普及を強調されたのである。そして、今度はその同じ展開論理のもとに、企業形態としての「株式会社」制度の普及に伴って必然化する銀行との〈結合関係〉に「金融資本の核心」を見出すのである。それゆえ、その「核心」は、直接的な再生産過程から「遊離」した〈銀行と産業との結合関係〉による、その新たな生産諸力の許容・包摂・支配という〈支配機構の形式〉として規定されざるを得なくなるとともに、その具体的発現形態をいわば〈重工業株式会社〉に求めることになったのである。「株式会社」の規定の際に欠落した「独占」は、再びこの「金融資本」の規定に際して欠落するのは、当然のことといえよう。

こうした宇野氏の「金融資本」の概念規定は、既に確認したレーニン『帝国主義論』に依拠するわれわれとしては、全く容認することはできない。「金融資本」が独占＝帝国主義段階の主導的契機であるということの意義を、宇野氏が主張されるように、そしてわれわれがこれまで見て来たように、単なる〈支配機構の形式〉に解消してはならないのであって、新たな、しかも「巨大化」した生産諸力の発展に直接基礎づけられた産業独占が、銀行独占との「融合」・「癒着」のもとで——従って、「金融資本」として——新たな資本蓄積の主体となる、という点にこそ求めなければならないからである。さらに、こうした〈支配機構の形式〉からは、この独占＝帝国主義段階の経済諸関係の変容を、資本蓄積・生産諸力の発展と固有の矛盾展開として分析・把握するという、現状分析に直接係る方向が、全く閉ざされてしまうからにほかならない。

(3) ところで、宇野氏は、第二節「株式会社の機能」における「金融資本」の「一般的規定」が、事実上、いま指摘した〈支配機構の形式〉に帰着すること認識されていたようである。それゆえにこそ、この第二節の末尾に、次のように第三節(「金融資本の蓄積様式」)への展開を記さざるを得なかったものと考えられる。

「……株式会社形式の発展……の内に確立される金融資本は、単にそういう支配機構

の形式的問題に解消して理解されてはならないのである。それは、……特殊な蓄積の様式をもって発展するものとして規定されなければならない⁽¹⁴⁾と。

しかしながら、「金融資本」を「支配機構の形式に解消して理解されてはならない」その根拠が全く示されず、しかも、事実上、それに「解消」されている以上、宇野氏のいわゆる「金融資本の蓄積様式」は、〈重工業株式会社〉の「蓄積様式」に必然的に帰着せざるをえないのである。以下、稿を改めて、この点を検討したい。

(未完)

(注)

- (1) 宇野前掲『経済政策論』、162頁。「改訂版」、178頁。
- (2) レーニン前掲『帝国主義』、50頁。
- (3) 同上、76頁。
- (4) 同上、78頁。このレーニンの「金融資本」規定は、周知のように、R・ヒルファディング『金融資本論』における「定義」——「金融資本とは、銀行によって支配せられ産業家によって使用せられる資本である。」——に対する批判——「この定義は、そのなかに、もっとも重要な契機の一つ、すなわち、生産と資本との集積は、それが独占にみちびきつつあり、またすでにみちびいたほどに高度に達している、ということにたいする指摘がないというかぎりで、不完全である」(同上、77頁。)——として定式化されたものである。このレーニンのヒルファディング批判をめぐって、また、「金融資本」の概念そのものについては、今日まで夥しい研究がある。しかし、本稿ではこうした諸論議に立入って考察することそれ自体が目的ではなく、レーニンのヒルファディング批判の、その含意を、宇野氏の「金融資本」概念の批判基準として、確認しておくに留めること、念のために付言しておきたい。なお、この「金融資本」をめぐる諸論議については、生川栄治編『現代の金融資本』(有斐閣、1976年)、信用理論研究会編『信用論研究入門』(有斐閣、1981年)などを参照。また、後論との関係で、「宇野段階論の金融資本における基本規定」を「信用範疇の欠落」という視点から検討・批判したものとして、生川栄治「金融資本の論理構造」(『経営研究』、第30巻第3・4合併号、1979年11月)を参照。
- (5) 例えば、この点、本間要一郎氏は、次のように述べられる。「……このような『融合』においては、銀行資本のもつ強力な金融的諸機能と、全産業部門におよぶ『普遍的』な支配力とが、決定的なモメントにならざるをえないというところに、それが、たんなる「独占資本」ではなくて、「金融資本」とよばれる意味がある。「金融資本」は、個々の産業部門にあらわれる独占体とは区別されるところ、銀行と産業(それはいくつかの諸部門にまたがるであろう)との、独占的支配のためのもっとも高度の結合体なのである。そこで、このような独占的結合としての、「金融資本」の支配は、

「金融寡頭制」という体制をとることになる……」(「金融資本にかんする若干の諸問題」, 『経済』, 1967年12月号, 76頁。)

- (6) この解明を通じて, 独占=帝国主義段階の変容の総体把握に至ること, そして, そのために有効かつ不可欠な分析視角こそ, われわれが主張する「独占資本主義分析の基本視角」にほかならない。前掲拙稿を参照されたい。
- (7) 前掲「馬場(一)」, 102頁。
- (8) 宇野前掲「経済政策論」, 132頁。「改訂版」, 173頁。
- (9) 同上, 151頁。「改訂版」, 167頁。
- (10) 同上, 165頁。「改訂版」, 181頁。
- (11) 宇野氏は, この点, 「積極的にはドイツ重工業の発展に規定されつつ, イギリスにおいて特殊の, 直接, 生産過程に基礎をもつとはいえない形態で発現することをも妨げるものでない」(同上, 165頁)として, いわゆる「金融資本」の「ドイツ型」と「イギリス型」を区別されている。このことが後に改めて問題となる。
- (12) 同上, 149頁。「改訂版」, 166頁。
- (13) 同上, 165頁。「改訂版」, 181頁。因に, 馬場氏は, この点が「金融資本についての形態的規定の軸心である」(前掲「馬場(一)」, 171頁)として強調されている。
- (14) 同上, 157~158頁。「改訂版」, 173~174頁。